

実体と因果関係

— アリストテレス主義の継承者ロックと批判者ヒューム —

秋 元 ひろと

Substance and Causation: Locke's Inheritance and Hume's Criticism of Aristotelianism

Hiroto AKIMOTO

Abstract

The standard history of philosophy says that empiricism, first enunciated by John Locke, through the process of its transmission to George Berkley and David Hume, was brought by degrees to completion. But, in my view, such a description of British empiricism needs rewriting. In this paper, I trace the history of theories of causation, beginning with that of Francisco Suárez, an early modern Scholastic, and thereby show that Locke and Hume take different attitudes toward Aristotelianism. Hume, who develops his epistemology as a theory of causation, follows Berkley and Malebranche in their criticism of an Aristotelian element of the scholastic theory of causation. By contrast, Locke, who, in spite of his criticism of the traditional concept of substance, develops his epistemology as a theory of substance and sees causation entirely in terms of substance and its essences, is faithful to Aristotelianism, even more so than Scholastics such as Suárez.

はじめに

ロックによってはじめて自覚的に提唱された経験論は、バークリを経てヒュームに受け継がれていく過程を通じて次第に徹底されていった。標準的な哲学史は、イギリス経験論の歴史をこのように教えている。しかし、こうした哲学史記述は見直しの必要がある、あるいは少なくとも、それとは別の哲学史記述があり得ると私は考えている。

バークリの位置づけについては差し当たり判断を保留するとして、ロックとヒュームの認識論が、何を中心主題とするかという点で性格を大きく異にするものであることを指摘しておこう。『人間知性論』において、ロックが伝統的な実体概念を批判したことはよく知られている。しかし、ロックは実体概念それ自体を放棄したわけではないし、彼が実体の問題を論じるのは、伝統的な実体概念の解体に取り組んだ同書の第 2 巻第 23 章にかぎられるわけでもない。ロックが『知性論』の冒頭で目標として掲げる認識論的探究、すなわち「人間の知識の起源、確実性、範囲、ならびに信念、意見、同意の根拠と程度の探究」(E, 1.1.2) に本格的に着手するのは第 4 巻においてであるが、本稿第 2 節で詳しく見るように、そこでも実体についての知識が中心主題となっている。実際『知性論』は、その全体が実体の問題を縦糸として構成されているといっても過言ではないのである。

ヒュームに目を移せば、たしかに彼は、ロックの認識論的探究を引き継いで「人間知性の範囲と力を詳しく知り、われわれが用いる観念の本性、およびわれわれが推論に際して働かせる作用の本性を説明

する」(T, Intro., 4) ことを『人間本性論』の課題としている。そして同書の第1巻第3部は、「知識と蓋然性について」という表題が示唆するように、ロックの『知性論』第4巻「知識と意見について」を意識して書かれたものと思われる。しかし、ヒュームがそこで取り上げる主題の中心は、実体ではなく因果関係である。実際、実体の問題は、『本性論』の第1巻第6節と第4巻第3節で簡単に扱われるだけなのである。しかも、この傾向は『人間知性研究』においていっそう顕著である。『知性研究』は、『本性論』の第1巻を、その第3部の因果論を中心として再編するという仕方を書き直したものであって、実体を論じた独立の節をもたないのである。^[1]

もっとも、ヒュームが実体の問題を簡単に扱うだけで済みますのは、彼がそれをロックにおいて解決済みの事柄と見なしたからである、ということはあるかも知れない。しかし、中心主題が実体であるか因果関係であるかという相違は、イギリス経験論の哲学史の見直しを迫るような事態にもかかわる事柄である。以下では、このことを二人とアリストテレス主義の関係に着目しつつ明らかにしてみたい。

ちなみにイギリス経験論をロック、バークリ、ヒュームというトリオの仕事と見なす哲学史記述に先鞭をつけたのは、ヒュームの懐疑主義に対抗して常識の立場を擁護したリード (Thomas Reid, 1710–96) である。リードは、観念を意識内在的なものと捉える理論が懐疑主義をもたらしたとして、その起源をデカルトに求め、デカルトからマルブランシュを経てロック、バークリ、そしてヒュームに至る懐疑主義の発展史を描いたのである。イギリス経験論の歴史を考える上で、デカルトをはじめとする大陸の哲学者たちとの関係に注目することは重要である。しかし、スコラ学まで遡って哲学史を辿りなおす点に私の試みの大きな特徴があり、そうすることによって、リードが描いたものとは異なる道筋が見えてくるだろう。

1. 因果論の系譜 — スアレスからヒュームまで^[2]

(1) 創造、保存、協働

ヒュームが、その因果論において取り組んだ課題は何であったのか。これを明らかにするため、スコラの因果論の紹介から始めることにする。手掛りとするのは、デカルトをはじめとする近世の哲学者たちにも大きな影響を与えたスアレス (Francisco Suárez, 1548–1617) の『形而上学討論集』*Disputationes Metaphysicae* (1597) である。^[3]

『形而上学討論集』は、形而上学を神学の基礎学として位置づけて、その諸問題を論じた書である。全部で54の討論からなり、討論12から27までが原因の問題を扱っている。^[4]

まず「原因」は、結果に「存在」を付与する原理であるとされる (DM, 12.2)。これはアリストテレスの四原因 (質料因、形相因、作用因、目的因) を包括する原因の一般的規定である。つぎに四原因の一つである「作用因」は、「能動作用 action」によって結果に存在を付与する原理であるとされる (DM, 17.1)。作用因は、能動作用を発揮する「作動者 agent」の違いによって二つに、すなわち神が作動者であるものと、被造物が作動者であるものとに大別される。前者は「第一原因 primary or first cause」と呼ばれ、後者は「第二原因 secondary cause」と呼ばれる (DM, 17.2)。

第一原因である神の能動作用は「創造 creation」「保存 conservation」「協働 concurrence」の三つに区分され、それぞれ討論20から22で論じられる。

討論20「第一作用原因である神とその第一能動作用について、それは創造である」

討論21「第一作用原因である神とその第二能動作用について、それは保存である」

討論22「第一原因である神とその第三能動作用について、それは第二原因との協力ないし協働である」

三つの能動作用は、それぞれつぎのようなものである。

被造物は、第一原因である神がそれに存在を付与することによって「創造」される。

被造物の存在は、第一原因である神が、一度創造した被造物に存在を付与する能動作用を発揮し続けることによって「保存」される。^[5]

被造物が第二原因として能動作用を発揮するのは、第一原因である神が被造物を創造し保存するだけでなく、被造物と「協働」して能動作用を発揮することによってである。

これは「協働論 concurrentism」と呼ばれる考え方であり、スアレスの支持した立場である。しかし、神と被造物が作用因として発揮する能動作用に関しては、これとは異なる二つの立場、それぞれ「保存論 conservationism」「機会原因論 occasionalism」と呼ばれる立場がある。

(2) 協働論、保存論、機会原因論

協働論は、スアレスの立場としてすでに紹介した。それはトマスも支持した立場であり、スコラの因果論の標準的見解であった。トマスは、結果に存在を付与する能動作用は第一原因である神に帰属させ、その存在を個別化し限定して、特定の結果とする能動作用は第二原因である被造物に帰属させるという仕方で、神と被造物のあいだの役割分担と協働のあり方を論じている。^[6]

つぎに保存論によれば、第一原因である神は、被造物を創造し保存するだけで協働まではせず、第二原因である被造物は、神とは独立に能動作用を発揮する。協働論の神も被造物を保存するが、保存論の神は、保存するだけで協働まではしない。協働論とこのようにした差異を明確化するため「ただの保存論 mere conservationism」という言い方がされることもある。

これはフランスのスコラ学者ドゥランドゥス (Durandus, 1275 頃–1334) がトマスに対抗して打ち出した立場である。デカルトもこの立場を支持したとされるが、後期著作においては機会原因論に傾いているとする解釈もある。^[7]

協働論も保存論も被造物が第二原因としてではあれ真の原因として能動作用をもつことを認める。これに対して機会原因論は、協働論や保存論がもつそうしたアリストテレス主義の要素を批判する。真の原因として能動作用を発揮するのは、第一原因である神のみであり、被造物は真の原因ではなく「機会原因 occasional cause」であるに過ぎないというのである (機会原因が何であるかについては、後述する)。

中世における機会原因論の有力な支持者として知られるのは、イスラーム神学者のガザーリー (al-Ghazali, 1058–1111) である。アリストテレス主義に批判的なこの立場は、スコラ学においてはドイツのビール (Gabriel Biel, 1410–95) など一部の学者が支持しただけで主流の思想にはならなかった。しかし、機会原因論は、スコラのアリストテレス主義を批判した近世の哲学者たちのなかに、マルブランシュをはじめとする支持者を見出していくことになる。^[8]

(3) マルブランシュとパークリ

アウグスティヌスの影響を強く受けて思索し、自身も聖職者 (オラトリオ修道会の司祭) であったマルブランシュは、神と被造物との区別を強調する立場から協働論や保存論がもつアリストテレス主義の要素を批判して機会原因論を唱えた。

被造物の世界に起こる様々な出来事、たとえばある物体の運動は、何かを原因として生じた結果である。これについて、その物体に衝突した別の物体の運動が原因であるとする見方がある。しかし、被造物である物体が「力 force」や「力能 puissance」や「効力 efficace」(Ecl, 15.204) をもつと考えると、物体を真の原因と見なすのは間違いである。「真の神はひとりしかいないのだから、真の原因は一つしかない」(RV, 6.2.3.312) のであって、神のみが力能をもつのである。しかし、個別の原因 (と

されるもの)が生起するたびごとに、神が直接介入して個別の結果を生起させるわけではない。神は、ほとんどいつでも、つまり奇蹟を起こす場合を別にすれば、「自身が確立した運動伝達の一般的法則」(Ecl, 15.214)を介して力能を行使するのだからである。その法則に従って、個別の原因(ある物体の別の物体への衝突)に引き続いて個別の結果(衝突された物体の運動)が生起する。個別の原因は、神が設定した運動法則が発動して、それに従う運動が個別の結果として生じるきっかけ、つまり「機会原因」であるに過ぎない。この点を見誤って、被造物が原因としての力能や効力をもつと見なすアリストテレス主義は、キリスト教信仰を脅かす「最も危険な誤り」(RV, 6.2.3, title)であり、「卑しむべき哲学」(RV, 6.2.3.312)だというのである。^[9]

バークリは、因果論に関するかぎり、マルブランシュに近い立場をとっている。たしかに、二人のあいだに大きな見解の対立があることは否定できない。たとえばバークリも「運動の法則」について語るのだが、その位置づけはマルブランシュとはまったく異なっている。マルブランシュが運動法則を神が設定したものと見なすのに対して、バークリによれば、それは経験に基づいてわれわれ人間が構成する「数学的仮説」にすぎず、神に直接由来するものではない。しかし、クロインの主教も務めた聖職者であったバークリは、神と、被造物である物体との区別を強調する点では、基本的にマルブランシュの立場を引き継いでいる。^[10]

バークリは、物体の運動を論じてその原理である作用因の在り処を問う。そのとき彼が繰り返し強調するのは、運動の原理として「力 vis」や「作動力 potentia actrix」(DMo, 71)を発揮するのは物体に属する何かではない、ということである。「物体のどの部分も、その属性も運動を生み出す真の作用因ではない」(DMo, 29)。「万物の真の作用因かつ保存因であるものこそが、最高の権利によって、それら万物の始原かつ原理と呼ばれる」(DMo, 36)のであって、それは「万物の最高最大の創始者にして保存者たる神」(DMo, 34)だというのである。ちなみに「保存因 causa conservatrix」や「保存者 conservator」という言い回しは、バークリの思索がスコラの議論を踏まえたものであることを示している。

(4) スアレスからヒュームまで

以上の確認を踏まえて、スアレスからヒュームに至る因果論の系譜を辿り直し、そうすることによってヒュームの直面した課題が何であったのかを明らかにしてみよう。なおスアレスが「能動作用」と呼んだものを、マルブランシュは「力」「力能」「効力」、バークリは「力」「作動力」と呼んでいる。そこで以下では、ヒュームも用いる「力能」の語でそれらを代表させることにする。また神が属するレベルを L-I、被造物が属するレベルを L-II と呼ぶことにして話を進める。

スアレスも支持したスコラの因果論の標準的見解は、協働論であった。それは神をトップとするトップダウンの図式をとりつつ、L-I に属する神と、L-II に属する被造物がともに原因として力能をもつことを認める。

これに対してマルブランシュとバークリは、神を究極的原因と見なして被造物世界の出来事を説明しようとするのだから、スコラ学の神をトップとするトップダウンの図式は受け継いでいる。しかし、スコラの因果論がもつアリストテレス主義の要素、すなわち L-II に属する被造物が原因として力能をもつことを認める点は批判し、原因として力能をもつのは L-I に属する神のみであるとした。その結果、被造物の世界である L-II は、もっぱら受動性が支配する、結果のみの世界、原因もその力能も不在の世界となった。

ヒュームは、マルブランシュやバークリがスコラ学から受け継いだ神をトップとするトップダウンの図式はとらない。しかし、彼らのアリストテレス主義批判は受け継いだ。つまりトップダウンの図式の

L-Iは切り捨てた上で、L-IIだけを、マルブランシュやバークリが理解するかぎりでのL-IIだけを受け継いだ。それは原因もその力能も不在の世界である。この状況において原因の力能をどのように扱うか。そのようなものなどないと言い切る、あるいは原因の力能の話はしないという選択肢もあったはずである。しかしヒュームは、その道は採らない。では、どうするか。これがヒュームの直面した課題であった。そして以下の引用が示すように、彼の因果論のこうした哲学史的背景はヒューム自身も自覚していたことである。

ヒュームは、原因がもつ「力能 power」や「効力 efficacy」や「活動力 energy」に言及してつぎのように述べる。

「私がたったいま検討し終えたのは哲学のもっとも高尚な問いの一つ、すなわち「原因がもつ力能と効力に関する問い」であり、それは諸学のすべてにとって大きな関心の的であるように思われる。」(THN, 1.3.14.2)

「原因がもつ効力に関する問い、すなわち原因に結果を後続させる性質に関する問いほど、古代の哲学者たちのあいだでも当代の哲学者たちのあいだでも、その重要性と難しさのために多くの論争を引き起こした問いはない。」(THN, 1.3.14.3)

「原因がもつ効力ないし活動力が位置づけられるのは、原因それ自体のうちにでも、神のうちにでも、はたまたこれら二つの原理の協働のうちにでもない。それは、もっぱら魂に、すなわち、過去のすべての事例において二つまたはそれ以上の対象が合一していたことを考える魂に属するのである。」(THN, 1.3.14.23)

ヒュームは、原因がもつ力能は「原因それ自体」つまりL-IIに属する被造物のうちにはない、としてアリストテレス主義を退ける。L-Iに属する「神」のうちにもない、としてマルブランシュやバークリの説を退ける。L-Iに属する神とL-IIに属する被造物という「二つの原理の協働」のうちにもない、としてスアレスの協働論（スコラ学の標準的見解）も退ける。そして原因の力能の在り処を「魂」に求める。これは魂（心）が原因として力能をもつ、ということではない。もしそうであれば、物体のうちにはないが、魂という被造物のうちに、つまりL-IIに属するものに力能を見出していることになってしまうからである。そうではなくて、物体間の因果関係にかぎらず、一般に因果関係は、因果推論を行うわれわれ人間の魂の働きと切り離して理解することはできない、ということなのである。

スコラ学の伝統を踏まえることによって、因果論の系譜におけるヒュームの位置づけが明らかになった。ヒュームは、スアレスからマルブランシュを経てバークリに至るラインの延長線上に位置している。また本稿では詳しく扱うことが出来なかったが、スアレスとマルブランシュのあいだにはデカルトがいると見ることもできるだろう。これを踏まえてつぎに考えてみたいのは、ロックの位置づけである。ロックは、スアレスからヒュームに至るラインから外れているように思われる。この点を明らかにするため、次節では、ロックの認識論を、その中心主題である実体についての知識の問題に焦点を絞って概観する。

2. ロックの認識論

(1) 実験的知識と学的知識

『知性論』において、ロックが認識論的探究に本格的に取り組むのは第4巻「知識と意見について」においてである。「知識 knowledge」と「意見 opinion」は、スコラ学の伝統に根差す認識論の基本概念で、ロックは、前者を「確実性 certainty」によって、後者を「蓋然性 probability」によって特徴づ

けている。しかしロックは、意見や信念も含めた知識一般を指す語として「知識」を用いることもある。たとえば「学的知識 scientific knowledge」(E, 4.3.26)と「実験的知識 experimental knowledge」(E, 4.3.29)を区別する場合がそれにあたる。前者の知識は「確実性」をもつが、後者の知識は「蓋然性」しかもたないとされるのだからである。ちなみに「学的哲学 scientific philosophy」「実験的哲学 experimental philosophy」(E, 4.3.26)も「学的知識」「実験的知識」とほぼ同じ意味で用いられる語である。^[11]

ところで、ロックがこれら二種類の知識ないし哲学を区別して論じるのは、実体とりわけ物的実体について「学的知識」が成立するか否か、という実体についての知識をめぐる問いである。^[12] これは『知性論』第4巻の認識論の中心的な問いの一つであり、その検討に多くの紙数が割かれている。そしてロックは、その問いに「否」と答える。実体（以下、物的実体の意味）について成立するのは、せいぜい「実験的知識」であって、われわれ人間には「自然的物体の完全な「学知 science」」(E, 4.3.29)は望むべくもないというのである。

このような結論に至るロックの議論はのちほど検討することにして、はじめに「学的知識」と「実験的知識」の意味を明らかにしておこう。ロックは、それらの語に厳密な定義を与えているわけではない。しかし、彼が実体について成立する知識に関して述べることから関連する表現を拾い集めて整理してみると、二種類の知識がそれぞれどのようなものであるかが見えてくる。

ロックによれば、われわれは「自然的物体に関する普遍的真理についての確実な知識」(E, 4.3.25)をもつことができない。たとえば、一般に金が展性をもつことは「それがどれほど蓋然性の高いことであっても確実に知ることはできない」(E, 4.3.14)。それに対して、たとえば三角形の内角の和が二直角であることを知る場合、われわれは「これら二つの観念〔三角形の三つの角の観念と二直角の観念〕のあいだの結合」(E, 4.3.29)が不易であることを見出す。このように「われわれがもつ観念を観想し、それらのあいだの関係と対応を考察すること」(E, 4.12.9)こそは「確実で普遍的な知識の唯一の真の道」(E, 4.3.14)である。ところが、われわれは、こうした仕方では物体について何かを知ることはできない。「物体の知識に関しては、われわれは、個別の実験から拾い集めることのできるものに甘んじなければならない」(E, 4.12.12)のであって、「個別の経験が事実についてわれわれに告げ知らせるところを越えて先に進むことはできない」(E, 4.3.29)。「人間の勤勉が「物理的事物についての」有用で「実験的」な哲学をどれほど前進させようとも、「学的」なそれは、なおわれわれの手の届かないものであり続けるだろう」(E, 4.3.26)。

学的知識を特徴づけるキーワードは、「確実性」のほか「普遍性」「観念」「観想」である。それに対して実験的知識を特徴づけるのは、「蓋然性」のほか「個別性」「事実」「経験」「有用性」である。観念間の関係の観想を通じて得られる、確実性と普遍性をもつ知識、それが「学知的知識」であるのに対して、「実験的知識」は、事実についての個別の経験を通じて得られる知識であり、有用ではあるが蓋然性しかもたない知識、確実性も普遍性ももたない知識だということである。

ロックは、論証の出発点に置かれる、公準と呼ばれる原理的命題（第4巻第7章）や、三段論法を用いた論証（第4巻第17章）が知識獲得に関してもつ意義を疑問視するなど、アリストテレス主義に対して批判的な態度を表明する。しかし、アリストテレスが個別の事実についての知識である経験と、事実を一般化して捉える、普遍性をもつ知識である学知とを区別していること、実用を目的とする制作知と、知ることそれ自体を目的とする観想知とを区別していることなどを思い出せば、「実験的知識」と「学的知識」の区別は、「知識」と「意見」の区別以上に、知識に関する伝統的思考法を踏まえたものであることが分かる。

(2) 実体についての知識とその限界

あらためて確認すれば、実体については、実験的知識は成立するが学的知識は成立しないという。ロックがこのように考えるのはなぜか。その理由を明らかにするため、そうした結論に至るロックの議論を検討することにしよう。しかし、そもそも実体についての知識とは何であるのか。実体について何かを知るとはどういうことであるのか。はじめに、この点を明らかにしなければならない。

実体についての知識とは、実体をもつ「性質 quality」や「力能 power」ないし「作用 operation」についての知識である。実体について何かを知るとは、ある種の実体が、その種の実体としてもつまざまな性質や力能・作用を知ることなのである。ちなみに力能・作用は、ある実体が他の実体に及ぼすそれ（「能動的力能」と呼ばれる）と、他の実体から被るそれ（「受動的力能」と呼ばれる）との両方を含む。

そして以上のことは、ロックの分析枠組みである「観念」に引き直していえばこうなる。実体の「複雑観念」は「一つの主体に合一し、したがって共存するいくつかの単純「観念」の集合」(E, 4.3.9)であって、それゆえ「実体についてのわれわれの知識は……いくつかの別個の「観念」が、同一の主体において必然的に結合し、共存することについてのもの」(E, 4.6.10)である。^[13]たとえば金が展性をもつかどうかを知るとは、展性の観念が、金と呼ばれる実体の複雑観念を構成するその他の単純観念（一定の色と重さ、可融性、王水中での可溶性など）と共存し必然的に結合しているかどうかを知ることにはほかならない。^[14]

ところが、それらの観念のあいだに「目に見えるような必然的結合はない」(E, 4.3.10)。^[15]したがって実体については、普遍性と確実性を兼ね備えた学的知識は得られないという。その理由を説明してロックは、粒子仮説に基づく機械論を前提とした議論を展開する。

「[われわれ人間には] 感覚不可能なこれらの粒子は、物質の活動的部分であり、自然の偉大な道具なのであって、物体のすべての二次性質だけでなく、物体の自然的作用の大部分がそれに依存している。それゆえ、それらの粒子の一次性質について精確・判明な「観念」をもたないわれわれは、物体についてわれわれが知りたいと欲することについて、治療不可能な無知のままに留め置かれる。私は、つぎのことを疑わない。すなわち、もしある二つの物体の微小な組成部分の形、大きさ、組織、運動をわれわれが発見することができるなら、われわれは、それらの物体が相互に及ぼす作用のいくつかを、試行[によって確認]するまでもなく、われわれがいま四角形や三角形がもつ固有性を知ると同じように、知ることだろう。」(E, 4.3.25)

ロックの考え方をよく表している一節である。補足も交えながら解説しよう。

物体がもつ性質や力能（二次性質）は、物体の微小部分をもつ性質（一次性質）に依存する。換言すれば、物体のマクロレベルでの様態は、物体のミクロレベルでの様態に依存する。しかし、われわれ人間は、後者のことは知らないし、前者が後者に依存する仕方、すなわち後者がどのようにして前者を生み出すのかも知らない。ロックの言葉でいえば、物体の微小部分の「実在的組成 real constitution」(E, 4.3.14)の「観念」はもたないし、微小部分の「機械的作用 mechanical affection」(E, 4.3.25)の「観念」ももたない。それゆえ、われわれは、物体がもつ性質や力能について普遍的で確実な知識をもつことはできない。たとえば金が展性をもつかどうか、すなわち展性の観念が、金の複雑観念を構成するその他の単純観念と必然的に結合しているかどうかを知ることにはできない。これをわれわれが知り得るのは、「試行」を通じてそれが確認される範囲内に限定され、「そうした試行が別のときにも成功するかどうかについて、われわれは確信をもつことができない」(E, 4.3.25)のである。

(3) 実体の実在的本質と唯名的本質

実体についての知識とその限界を、ロックは、実体の「実在的本質 real essence」と「唯名的本質 nominal essence」との対比という観点からも論じている。

実体たとえば金の「唯名的本質」とは、「金」という語が表す複雑「観念」(E, 3.6.2)であり、具体的には、一定の色と重さ、展性、可融性、王水中での可溶性などの諸性質の単純観念からなる複雑観念である。それに対して「実在的本質」とは「その物体の感覚不可能な諸部分の組成であり、金もつそれらの諸性質ならびに他の一切の諸固有性がそれに依存しているところの組成」(Ibid.)である。

ところが「それらの諸性質すべての基礎にある実在的組成についても、諸性質が実在的組成からどのようにして生じてくるかについても、われわれは無知であるから、われわれはそれらの諸性質のあいだの結合も、相互依存関係も知覚しない」(E, 4.6.10)。つまり、実体について普遍的で確実な知識をもつことがない。唯名的本質を表す実体の観念は「われわれの感覚が発見する外見上の諸性質からなる不完全な集合」(Ibid.)であって、それは「実体の非常に不完全な」観念」(E, 4.6.12)だというのである。

したがって、逆にいえば、こういうことになる。

「実体に見出される可感的諸性質を生み出す実在的組成は何であるか、実在的組成からそれらの性質がどのようにして生じてくるか、こうしたことが知られるような実体の「観念」をもしわれわれがもつなら、われわれは、実体の実在的本質の種的「観念」をわれわれ自身の心のうちにもち、それによって、いまわれわれが感覚によってできる以上の確実性をもって実体の諸固有性を見出し、実体がどのような諸性質をあるいはもち、あるいはもたないかを発見することだろう。」(E, 4.6.11)

あらためて確認すれば、実体の唯名的本質とは、われわれがある実体たとえば金に見出す「可感的諸性質 sensible qualities」ないし「外見上の諸性質 apparent qualities」である。それは、われわれの認識と相対的に現象レベルで捉えられた諸性質に応じて言語の上で、つまり「金」という語の意味として設定される本質である。それに対して実在的本質とは、そうした現象レベルで捉えられた諸性質の背後にあって、それらを生み出していると想定される「実在的組成 real constitution」であり、われわれの認識とは独立に実在レベルで成立していると想定される本質である。ところが、われわれの認識は実在のレベルにまでは達しないから、実体についてわれわれがもつ知識は、実在的組成の把握に基づく完全なものではなく、現象レベルでの可感的諸性質の把握に基づく不完全なものにとどまる。したがって、もしある人の認識が実在レベルにまで達して、実体の完全な「観念」をもつなら事態は一変することになる。たとえば金の展性について「彼は「確実」な普遍的命題を作るだろう。つまり「すべての金は展性をもつ」という命題の実在的真理は、「すべての直線三角形の三つの角は二直角に等しい」という命題の実在的真理と同じ「確実性」をもつだろう」(E, 4.6.10)というのである。

さてロックは、たしかに実体の実在的本質の認識可能性については懐疑的であり、実体についてのわれわれの知識は、唯名的本質についてのそれにとどまるとしている。そして唯名的本質と実在的本質との区別が、意識内在的な観念と意識外在的な存在との区別に重ね合わされると、意識内在の立場が徹底されていく過程としてのイギリス経験論という、お馴染みの哲学史記述が始まることになる。しかし、私がここで注目したいのは、懐疑的な結論をもつロックの議論が、各種の実体に固有な本質の探究というアリストテレス主義の自然学の枠組みの内部で展開されていることである。次節で論じるように、この点に着目すると、イギリス経験論に占めるロックの特異な位置が見えてくるからである。

3. アリストテレス主義との関係から見たロックとヒューム

ロックが、アリストテレス主義に対して批判的な態度を表明していることはすでに述べた。論証の出発点に置かれる、公準と呼ばれる原理的命題（第4巻第7章）や、三段論法を用いた論証（第4巻第17章）が知識獲得に関してもつ意義を疑問視することなどがそれである。しかし、ロックによるアリストテレス主義批判としてもっともよく知られているのは、彼が伝統的な実体概念を批判した（第2巻第23章）ことであろう。

ロックによれば、われわれが実体についてもつ観念は、ある種の事物に見出される諸性質の単純観念からなる複合体、つまり複雑観念にほかならない。ただ「それらの単純「観念」がどのようにして自存し得るか、これがわれわれには分からないので、それらの観念の存立基盤となる「基体 *substantum*」があって、それらの観念はそこに起因する、と想定することにわれわれは慣れてしまい、それゆえ、その基体を「実体 *substance*」と呼ぶのである」（E, 2.23.1）。「したがって、もしだれかが「純然たる実体一般について」自分がどのような「思念」をもつかを内省してみるなら、彼は、われわれのうちに単純「観念」を生み出すことのできる諸性質の、何かは分からない支えという想定のほかには、実体一般のいかなる「観念」ももたないことを見出すだろう」（E, 2.23.2）。

こうしてロックは、基体としての実体という伝統的な実体概念を批判する。それにもかかわらずロックは、前節で見たように、実体とその本質規定について語り、各種の実体に固有な本質の探究というアリストテレス主義の自然学の枠組みは継承している。「諸事物の、それ自体としてあるがままの本性、諸事物間の関係、諸事物の作用様式」（E, 4.21.1）を主題とする学、それが「自然学」だというのである。もっともロックが受け継いだのは、自然学の枠組みであってその実質ではない。実際ロックが理想とする自然学は、粒子仮説に基づく機械論の自然学である。つまり、実体の本質規定を物体のミクロレベルでの構造に求めるものであって、それを実体形相などと呼ばれるものに求めるアリストテレス主義の自然学とは大きく異なっている。しかし、ヒュームとの比較という観点から見て重要なのは、ロックがアリストテレス主義の自然学の枠組みは継承したことである。

ヒュームとロックの相違は、二人が何を典型例として議論を展開するか相違によく表れている。ヒュームが典型例としてもちだすのはビリヤードボールの衝突である。これは、彼が因果関係を認識論の中心主題としたことと関係している。彼の認識論的問題関心は、つぎの問いを出発点としている。われわれは、現在の知覚を超える事柄を「推論 *reasoning*」によって知ることができるが、その推論は何に基づいているのか。「因果関係 *causation*」に基づいている、というのがヒュームの答えである。

「一つの対象の存在もしくは能動作用から、他の〔対象の〕存在もしくは能動作用がそれに後続する、あるいは先行したという確信をわれわれに与えるような結合を生み出すものは「因果関係」のみである。」（THN, 1.3.2.2）

「われわれの感官の印象を超えるこの結論の基礎となり得るのは、「原因と結果の結合」のみである。」（Ibid.）

こうしてヒュームの認識論は因果論として展開していくことになるのだが、その際に因果関係の典型例としてもちだされるのがビリヤードボールの衝突なのである。この傾向は『人間本性論摘要』と『人間知性研究』においてとくに顕著であり、『摘要』では、ビリヤードボールの衝突は「われわれが知るかぎり、原因と結果の関係のもっとも完全な事例」（Abs, 9）だといわれる。ちなみにボールの衝突の例は、マルブランシュが物体の運動の伝達にそくして機会原因論を唱えるときに用いるものであり

(RV, 6.2.3.313, Ecl, 15.208-09)、ヒュームは、その例を受け継いだのだと思われる。^[16]

さてボールの衝突の例は、実体の種の違いは捨象して、物体一般の運動を論じる文脈に属するものであることに注意しよう。ボールの衝突を典型例として展開されるヒュームの因果論も、実体の種の違いをとくに考慮するようなものではない。それに対してロックの自然学が問題にするのは、各種の実体のそれぞれに固有の本質であり、彼の認識論的問題関心もそうした自然学の可能性、実体の本質を捉える知識の可能性にあった。したがって、ロックが典型例としてもちだすのは金などの特定の種の実体であり、彼は、その本質規定にかかわる諸性質を問題にする。そして力能や作用といった因果関係にかかわる事柄も、実体とその本質規定という枠組みのなかに組み込まれる。^[17] つまり、実体の本質規定にかかわる諸性質の一つとして扱われるのである。たとえば磁石と鉄について、ロックはつぎのように述べる。

「鉄を引き寄せる力能は、われわれが「磁石」と呼ぶ実体の複雑観念を構成する「諸観念」の一つであるし、そのように引き寄せられる力能は、われわれが「鉄」と呼ぶ実体の複雑観念の一部である。これらの力能は、磁石や鉄という主体に内属する性質として通用している。」(E, 2.23.7)^[18]

このように、ロックは、原因の力能を、もっぱら被造物である実体の本質規定にかかわる事柄として扱う。これは機会原因論が批判した、スコラの因果論がもつアリストテレス主義の要素にほかならない。ところで機会原因論は、スコラ学の神をトップとするトップダウンの図式は受け継いでいた。しかし、原因の力能をもっぱら被造物の事柄として扱うロックは、神をトップとするトップダウンの図式は採らない。つまり、原因の力能の位置づけに関するかぎり、ロックは、スコラ学者以上にアリストテレス主義に忠実なのである。^[19] もっとも、厳格なピューリタンの家に生まれたロックは敬虔なキリスト教徒であり、被造物が原因として力能をもつ世界は神が創造したものであることは疑わない。ただ被造物世界の因果関係を、神が原因としてもつ力能に訴えて説明することはしないのである。

このことは、ロックが、スアレスからヒュームに至るラインから外れていることを意味する。第1節で明らかにしたように、ヒュームは、マルブランシュやバークリがスコラの因果論がもつアリストテレス主義の要素を批判したことをうけて因果論を展開したのであって、彼は、スアレスからマルブランシュを経てバークリに至るラインの延長線上に位置している。もちろんヒュームは、マルブランシュやバークリがスコラ学から受け継いだトップダウンの図式は退けるのであるから、彼の立場は、スアレスとも、マルブランシュやバークリとも大きく異なっている。それでもヒュームは、トップダウンの図式を採る立場を経由した地点に立っている。それに対して、実体の問題を中心に論じ、しかも神をもちだすことなく被造物世界の因果関係を説明しようとしたロックは、スコラ学者（スアレス）以上のアリストテレス主義者として、はじめからトップダウンの図式の埒外に立っているのである。

この見方が正しいとすれば、イギリス経験論をロック、バークリ、ヒュームというトリオの仕事と見なすリード以来の哲学史記述も見直しが必要だということになる。リードは、デカルト、マルブランシュ、ロック、バークリ、ヒュームというラインを設定した。しかし、ロック、バークリ、ヒュームのラインはもちろん、デカルト、マルブランシュ、ロックのラインにも問題がある。本稿ではデカルトの話は詳しくしなかったが、マルブランシュ同様、デカルトもトップダウンの図式を採ったのだからである。それでは近世哲学史におけるロックの位置づけは、どのように考えたらよいのだろうか。同時代ではボイル、少し遡ればガッサンディやホブズとの関係がただちに検討対象に挙がってくる。しかし、この問題は、機会をあらためて論じることにしたい。

【注】

- [1] ロックが因果関係にかかわる事柄を論じた『知性論』の独立の節としては、第2巻第21章「力能について」と第26章「原因と結果ならびにその他の関係について」がある。第21章は『知性論』全編を通じて最長の章である。しかし、物的実体の力能の問題は、同章の冒頭の数節で扱われるのみである。残りの諸節が扱うのは、人間精神に備わる力能としての自由であり、それは認識論というよりはむしろ道徳論の主題である。第26章は、極めて短い章で、その冒頭で原因と結果の観念が扱われている。
- [2] 本節の論述は、中部哲学会・シンポジウム「近代の科学・哲学」（2015年9月27日、富山大学）において私が行った提題「因果関係の認識論と形而上学—スアレスからヒュームまで」の一部に基づいている。
- [3] テキストは、フレッドソーによる英訳を使用した。
- [4] 『形而上学討論集』の基本性格と、それが扱っている主題の概要については、Freddoso 2002, xi-xxix; cxxi-cxxiii を参照。
- [5] デカルトのいわゆる「連続創造説」は、この「保存」を踏まえたものである。ただし「第三省察」にはつぎのような発言があって、デカルトは「創造」と「保存」を同一視している。
「どんなものでも、それが持続する各瞬間に保存されるためには、それがまだ存在していなかったときに、それを新たに創造するのに必要であったのとまったく同じ力と能動作用を必要とする。それゆえ保存と創造は、ただ考え方の上で異なるだけである。」(AT, VII, 49)
- [6] 協働論については、Ott 2009, 20-23 を参照。
- [7] 前者の解釈については Schmaltz 2008 を、後者の解釈については Ott 2009, 64-78 を参照。
- [8] 中世の機会原因論については、Freddoso 2002, lxi, Marenbon 2009, 44-51 を参照。
- [9] 被造物が原因としての力能や効力をもつと見なすことが、なぜキリスト教信仰を脅かすのかについては、秋元 2015, 35-36 で簡単に述べた。
- [10] バークリをマルブランシュと同じ機会原因論者と見なしてよいかどうか、これは、物体の場合と精神の場合を区別するなどして、もう少し慎重に検討すべき事柄である。以下では、マルブランシュとバークリの立場を一つのものとして見なして議論を進めるが、その同一視は、一定の留保つきのものであることを断っておく。
- [11] experiment は、自然のプロセスへの操作的関与という意味での「実験」ではかならずしもなく、experience とほぼ同義の語として用いられる場合も多いのだが、便宜上 experiment は「実験」、experience は「経験」と訳し分けた。
- [12] 実体には、物的実体と霊的実体があり、ロックは、双方についての知識を問題にしている。しかし以下では、物的実体についての知識に考察を限定する。
- [13] 「主体」と訳した subject は、substratum の意味で用いられているので「基体」と訳すべきところである。しかし、ロックは substratum の語も使用するので、subject は「主体」、substratum は「基体」と訳し分けた。
- [14] 「王水中での可溶性」は「単純観念」ではなく「複雑観念」ではないのか、という疑問が当然生じる。しかし、これはロックも承知していたことである。彼は、実体の複雑観念を構成する単純観念のうちには「能動的力能」と「受動的な能力」が数えられるべきであるとして、つぎのように述べる。
「それらは単純「観念」ではない。しかし、当面の問題関心からして、それらを簡潔のため単純観念のうちに数えるのが好都合だろう。」(E, 2.3.7)
ロックは、実体の複雑観念の集合を構成する要素の意味で「単純観念」の語を用いているのである。
- [15] 「必然的結合 necessary connexion」は、ヒュームが、原因と結果のあいだの関係の一つとして重視するものである。それに対してロックは、実体の複雑観念を構成する単純観念どうしのあいだの「必然的結合」について語っている。このように「必然的結合」の用法にも、二人の中心主題の違いが反映されている。
- [16] マルブランシュとの関係を強く示唆する箇所として、EHU, 4.8; 7.21 がある。
- [17] ロックも物体の運動について論じる場合があり、ビリヤードのキューとボールの例を用いている箇所もある (E, 2.21.4)。しかし、彼が典型例として用いるのが金などの特定の種の実体であることに変わりはない。
- [18] 金を事例とした同様の発言が、E, 2.23.10 にある。
- [19] ロックの因果論がアリストテレス主義の側面をもつことについては、Ott 2009, 159-86 を参照。

【一次文献】

Berkeley, George

—1951 *De Motu*, in Vol. IV of *The Works of George Berkeley*. London: Thomas Nelson and Sons Ltd. [DMo]

Descartes, René

—1964 *Meditationes de philosophia prima*. Vol. VII of *Œuvres de Descartes*, publiée par Ch. Adam & P. Tannerey, Nouvelle présentation. Paris: Vrin. [AT]

Hume, David

—2000 *An Enquiry concerning Human Understanding*, A Critical edition, edited by Tom L. Beauchamp. Oxford: Clarendon Press. [EHU]

—2011 a *A Treatise of Human Nature*, A Critical edition, edited by David Fate Norton and Mary J. Norton. Oxford: Clarendon Press. [THN]

—2011 b *An Abstract of a Book, lately Published, entitled, A Treatise of Human Nature &c.*, in Hume 2011 a. [Abs]

Locke, John

—1975 *An Essay concerning Human Understanding*, Edited with an Introduction by Peter H. Nidditch. Oxford: Clarendon Press. [E]

Malebranche, Nicolas

—1997 *The Search after Truth*, Translated and edited by Thomas M. Lennon and Paul J. Olscamp. Cambridge: Cambridge University Press.

—2006 a *De la recherche de la vérité*, Présentation, édition et notes par Jean-Christophe Bardout. Paris: Vrin. [RV]

—2006 b *Éclaircissements sur la recherche de la vérité*, Présentation, édition et notes par Jean-Christophe Bardout. Paris: Vrin. [Ecl]

Suárez, Francisco

—1994 *On Efficient Causality, Metaphysical Disputations 17, 18 and 19*, Translated by Alfred J. Freddoso. New Haven: Yale University Press. [DM]

—2002 *On Creation, Conservation, and Concurrence, Metaphysical Disputations 20, 21 and 22*, Translation, Notes and Introduction by Alfred J. Freddoso. South Bend: St. Augustin's Press. [DM]

【二次文献】

Freddoso, Alfred J.

—2002 “Suarez on Metaphysical Inquiry, Efficient Causality, and Divine Action,” in Suarez 2002.

Marenbon, John

—2009 “The Medievals”, Chapter 4 of *The Oxford Handbook of Causation*. Oxford: Oxford University Press, 2009.

Ott, Walter

—2009 *Causation and Laws of Nature in Early Modern Philosophy*. New York: Oxford University Press.

Schmaltz, Tad M.

—2008 *Descartes on Causation*. New York: Oxford University Press.

秋元ひろと

—2015 「ヒュームの因果論 — 知識論と形而上学の「大変革」—」, 『三重大学教育学部研究紀要』第66巻(人文科学).

本稿は、科学研究補助金（基盤研究(c), 課題番号 25370014）の研究成果の一部である。